令和四年度四月の読書会

「本の虫、予言者ピーちゃんが大好きな国」

むかしむかし、あるところに国の官僚を勤める役人の主を持つ比較的に裕福な一家が住んでいました。

その一家の中にピーちゃんという男の子がいました。

ピーちゃんは、小さい時から本が大好きでよく「本の虫」と言われていました。

ピーちゃんは家族思いでお父さんのこともお母さんのことも弟のことも大好きでした。

そんな中でもとりわけ一番好きな人は、ピアノが上手なおばあちゃんでした。

おばあちゃんは、ピーちゃんにピアノを教えてくれましたが、ピーちゃんのピアノの腕は今一つでした。

ピーちゃんがおばあちゃんのことが好きだったのは、怖いもの知らずで学問をおさめていなくとも人を見る目が確かだったからです。相手が誰であれ「間違っていることは間違っている」とはっきりと物を言う人だったからです。

ある時、その当時、権力を握りつつあった政党のバッジをしている若者がバスの中で偉そうにして他の乗客に迷惑をかけていました。

普通の人は怖くて何も言えないのに、おばあちゃんははっきりと注意をして改めさせることができる人でした。

ピーちゃんにとって尊敬できる人は、家族以外で小学生の頃出会った学校の先生でした。

生涯尊敬の念を持ち続けた先生が二人いました

その先生はお姉さんが校長先生で妹が教科の先生でした。

ピーちゃんには字が下手な欠点があっても、その二人の先生は生徒の強みをしっかりと評価するとともに、弱みについても厳しくも温かく指導してくれました。

ピーちゃんはその二人の先生から、自分でできる勉強法を教わることができました。

そして周りの人が認める本の虫でしたので、とても多くの知識を吸収していきました。

そして二人の恩師の先生のおかげで身に着けた勉強方法によって、その後、大学に進学しても優秀な教授がいないという理由で授業中も隠れて読書を続けていました。

しまいには授業にでなくなり、一人ひたすらに大学の図書室で読書を続けました。当時の大学は卒業試験に受かれば卒業できたので卒業することができました。

ピーちゃんの弟は医者を目指していたのでその後、両親に経済的負担をかけまいと独立することを考えました。

その当時の世界情勢は不安定で、ピーちゃんが五歳の頃、第一次世界大戦が起きました。

ピーちゃんの国も戦争の影響で小国になってしまいました。

そして資本主義と社会主義が争う世界になっていきました。

そういう世界情勢が不安定な中、一気に台頭してきていたのが全体主義の政党です。

ピーちゃんは家族から独立して新聞記者になりました。

そしてその政党の偉い人たちにインタビューをする機会がありました。

ピーちゃんは本の虫でしたので、歴史的観点からその政党の危険性をいち早く見抜きました。

彼らは、威勢の良いことを言いますが、使っている言葉が汚い言葉を連発するのが特徴で、しかも否定的な言葉ばかり使っていました。

直感的にこの政党が政権を握ったら世界が危ないことになることをいち早く気づきました。

周りの人たちはのんきで気づきませんでしたが、本の虫ピーちゃんには本質を見抜く目がありました。

そしてそのことを警告する一冊の本を書き上げると、よその国の首相となる人に大絶賛されました。

ピーちゃんが二十九歳の時です。

そして初めて書いたその本は世界的に注目された本になりました。

理由は、ピーちゃんの予言が時が経つにつれて正しかったことが証明されたからです。

ピーちゃんは、イギリスに渡り運命の人と駅で再開し、結婚しました。

そのイギリスで雨宿りのために入った画廊で、ある国の絵にすっかりと心を奪われてしまいました。

その国の人の知覚の仕方がとても素晴らしかったからです。ピーちゃんの生涯の趣味となったのがその国のお気に入りの絵を集めることでした。

その後はアメリカに渡りました。

第二次世界大戦が勃発し、ピーちゃんが予言した通り、危ない政党は世界を恐怖に陥れました。

ピーちゃんと同じ人種を差別し、大虐殺も行いました。

ピーちゃんにとって、資本主義の未来も社会主義の未来も、そして全体主義の未来も暗いことを予言し、それに代わる人々を幸せにする組織づくりの方法を世界に知らせることを考えました。

そのために偶然誘いを受けたアメリカの大企業の組織調査を行う機会を与えられ、その経験をもとに、どうすれば人々が幸せになる組織が作れるかを考えるようになりました。

ピーちゃんが書いた本は、次々に世界的な注目を浴び、特に経営者の人たちの注目を浴びました。

本を出版して大学で教えることに専念しました。

あまりに世界を予言する本を次々と出版するので、ハーバード大学から何度も何度も教授として誘いを受けますが、自由な気風で小規模な大学で自分自身の研究を優先するために断り続けました。

ピーちゃんの著書には、人々を幸福にするための組織づくりのヒントが沢山盛り込まれていました。

そしてその本に書かれていることを一番参考にした国が、ピーちゃんが愛した絵の国でした。

ピーちゃんはその国の企業の経営者からも慕われ、その国を何度も訪問しました。

その理由の一つに愛する絵を収集することが目的でしたが、ピーちゃんが世界中で最も理想とした人物がその国の人だったからです。

その人の名前は、エイちゃんと言います。

エイちゃんはとても貧しい農家の出身でした。

小さい頃から本が好きで勉強を教えてくれる親戚の人がいました。

大きくなると、その国が危機的な状況に陥り、その国の政権を握る人たちを倒す計画を考えました。

しかし勉強を教わった親戚の人に真剣に止められて計画を取りやめにしました。

その後、ひょんなことがきっかけで逆に政権を握る人たちに雇われることになりました。

そして遠い国の視察旅行に連れて行ってもらう機会を得ることができました。

エイちゃんにとってその視察旅行により、自分の考えの浅はかさを身に染みて感じることができました。

多くの事を吸収して学び、自分の国に帰国してからは、官職につける程の立場を蹴って民間の中で多くの会社、銀行、福祉施設をつくることに一生を捧げました。

その福祉施設の中には、今の児童養護施設もあり、その運営にも尽力しました。

官ではなく民の力を活性化させるために子どもの頃に学んだ学問と、遠い国で学んだ体験を両立することに人生をささげたのでした。

その国は、小さな国で大国にすぐに侵略されてしまうような技術力も低い国でした。

しかし、歴史的な伝統がしっかりとしたその国は、エイちゃんたちの活躍により豊かになり、大国と戦争しても勝つような国になりました。

大国に長年虐げられてきた世界中の小国の国々は歓喜して喜びました。

しかし第二次世界大戦で、その国は敗れてしまいました。

ただピーちゃんは、初めて白人優越主義の国に有色人種の国が立ち向かったことで、世界中の白人の国から略奪され搾取され女性までレイプされ、男性が殺され続けた有色人種の国々の人々に勇気を与え、世界中に有色人種の国々の人たちが立ち上がる機運を高め、世界を変革したのだと大変讃えました。

ピーちゃん自身は白人でしたが、それでもピーちゃんは人種差別される側の白人でしたので、欧米を含んだ白人至上主義の歴史的な極悪さや限界を直感的にみてとっていました。

ピーちゃんが亡くなった後に、ピーちゃんの大好きな国は大災害に見舞われました。世界中の国々より多くの寄附金が集まりました。

しかし一つだけ不思議なことが起きました。

ピーちゃんが大好きだった国によってかつて植民地にされていた国が、もっとも寄附金が多かったのです。

そしてその国の国民たちは、寄附金が世界で一番多かったニュースを聞いて国全体で喜び誇りに思う程でした。

ピーちゃんが生きていたら、そのニュースを聞いて納得したことだと思います。

なぜならその国はピーちゃんが理想とした特性を持った歴史のある国だからです。

ピーちゃんとは、「知の巨人」「経営の父」「マネジメント」「知的労働者」「イノベーション」「民営化」など、人々を幸せにする目的で組織論を世界に広めたピーター・ドラッカーさんです。

ドラッカーさんは、オーストリア系ユダヤ人です。

新聞記者の時に直接に取材したのはナチスの幹部やヒットラーです。

ドラッカーさんのおばあちゃんが電車の中で注意したのは泣く子も黙るナチス党員です。

逃げ遅れた同胞たちの多くは強制収容所でガス室送りになりました。

ドラッカーさんはナチス党員たちの邪悪さに気づき、命の危険を顧みず『「経済人」の終わり』という本を書き、ナチス党員の邪悪さを世界に訴えました。

その本を大絶賛した政治家は、ナチスドイツと勇敢に戦ったイギリスのチャーチル首相です。

ナチスドイツとソ連が不可侵条約を締結するであろうこともその本で予言していました。

その後、ソ連や中国などの共産主義国家が崩壊することも予言していました。

ドラッカーさんが歴史的人物で一番評価したのは、わが国において二千二十四年に一万円札に使われることが決まっている、渋沢栄一さんです。

渋沢栄一さんのことを世界の中で類を見ないほど優秀な人だと絶賛しました。

『論語と算盤』という著書には、経営者として最も大事なことが書かれていることにも言及していました。

論語とは人として正しいことを行うことを教える学問であり、その論語を若い頃親戚の人に教わったことが渋沢栄一さんの人生の核となりました。

道徳と経済、一見相反するものを両立することが、よい組織をつくるために最も大切なことだとその本の中で言及しています。

渋沢栄一さんが大変尊敬した儒学者の中に中江藤樹さんがいます。

近江聖人中江藤樹記念館には、渋沢栄一コーナーがあります。中江藤樹さんを尊敬したことを表す資料が陳列されいます。

二千十一年、東日本大震災で最も多くの寄附を国民たちで行った国は台湾です。

なぜならば台湾は日本の植民地の前はオ

ーストラリアや中国の支配下にあり、略奪や虐殺、レイプ、搾取が当然のように行われていたからです。

日清戦争で日本の統治下になったのは千八百九十五年から日本が戦争に負けるまでの千九百四十五年の五十年間でした。

その五十年間に日本が取り組んだのは多くの日本人技術者が多大なる労力と命をかけて台湾のインフラ（国民福祉の向上と国民経済の発展に必要な公共設備）を整えたことです。

一番大きかったのは教育制度までしっかりと整えたことにより、文化水準があがり李登輝総統（千九百八十八年から二千年の十二年間総統を勤めた日本を敬愛する政治家）が台湾を改革する下地を作りました。

そのおかけで、台湾は今でも経済的な豊かな国を維持しています。

台湾の他にもパラオなどの東南アジアの国の人々が未だに日本のことを慕っています。

ドラッカーさんが日本を評価したのは、日本にはすべてのものに神様いるという世界には珍しい神道という宗教があることを挙げています。日本神道は、神社の中に鏡が飾られています。ただひたすらに己を磨くための鏡であり、どんなものにも神が宿るという信仰には、外国の優れた文化を受け入れ模倣し、日本流にアレンジしてしまう器用さ、バランスの良さを持つ民族は世界中探しても珍しいと絶賛しています。

白人至上主義が何百年も蔓延り、有色人種を劣った人種と蔑み、力によって略奪支配してきた歴史の中で、初めて対抗できた有色人種の国が日本です。

アメリカが原爆を落としたのも、同じ白人の国ナチスドイツを避けて有色人種の日本に落としたのも人種差別があったと言われています。

ユダヤ人として人種差別を受けてきた世界的歴史があるからこそ、ユダヤ人であるドラッカーさんにとっては、日本人の特性を大変評価していたのだと思います。

ドラッカーさんの組織論は難しいように思われていますが、もっとも人間にとって悪だと強調したのは、「人々に害をもたらすことをわかっていて行動する人たちだ」と言っています。

また最も尊敬した特性を「真摯さ」と表現しています。「真摯さ」とは、一貫した態度、軸がぶれない姿勢、真面目さ、真剣さ、要領が悪く愛想が悪くとも、トップに「真摯さ」がある組織が大事なことを、強調していました。

その模範とする人物として渋沢栄一さんを自らの著書に何度も紹介しています。

ドラッカーさんは、この世に害をなそうとしてなした人物に全体主義独裁国家ナチスドイツを率いた独裁者ヒットラーを挙げています。

二度とヒットラーのような独裁者を生み出さないように、同胞であるユダヤ人がおよそ百万人がガス室送りにされた人種差別という悲しい歴史を繰り返さないために、

人々が幸せになる組織論を生涯をかけて展開しました。

ドラッカーさんのマネジメントを世界にわかりやすく紹介した本として世界中に翻訳されている本が、『もし高校野球のマネージャーがドラッカーのマネジメントを読んだら』という本です。

作者の岩崎夏海さんは、秋元康さんの弟子で、大のゲーム好きです。『ファイナルファンタジーⅣ』というオンラインゲームをクリアするために、オンライン仲間を一致団結させるため、ドラッカーさんのマネジメントを学び、そしてそのことがきっかけになり小説を書きベストセラーになっています。

人々を幸福にするために、人の強みに焦点をあてるそのやり方は、ドラッカーさんが子どもの頃に出会った終生尊敬してやまなかった二人の女性教師の影響が強かったように感じます。

「出会えてよかった」という経験が、人の未来をつくるのだと思わせる本の虫ドラッカーさんの人生でした。

そしてドラッカーさんは、ソニーやイトーヨーカドーの創業者とも懇意にしていました。

イギリスの画廊で室町時代の水墨画に出会った衝撃が、日本に興味をもったきっかけだったと、ドラッカーさんは言っています。

世界の未来をずばり予言することで一躍有名になったドラッカーさんには、伝統を大事にしながらもよその国のよいところを柔軟に取り入れることができる、世界に類を見ない日本人の知覚の素晴らしさを誰よりも早く気づきました。

礼儀正しく自国の伝統を大事にした日本人の特性に気づいたのは、若き日に新聞記者として直接取材した、言葉が悪く全ての古き良き伝統や歴史を否定し破壊したヒットラーとの出会いがあったからかも知れません。

（おしまい）